

戦 争 の 青 春

旧制18期 森田 繁雄

今年も終戦来42年の記念日を迎えた私達の旧制能代中学に於ける体験は昭和史の戦争を離れて語り得ない。昭和19年2月15日の火災は校舎を全焼し、日課は焼跡片付けから始る。旧淳城小学校の仮校舎に移った頃は既に戦局はガタルカナル島が餓死の島と化し、ミドウェーに於て海軍が主力空母4隻を失い負け戦とは知る由もなかった。学徒動員令が出され全面的に学業放棄して、工場軍事関係の労働力として動員されたのである。私達は一部秋木機械へ、汽車通学の私は同僚と東雲陸軍飛行場へ米代川の鉄橋を渡り毎日通った。ドラム缶の運搬や雑役である。赤トンボ(高等練習機)を油布で掃除するのが楽しかった。操縦桿を握ったりして騒いだものである。重爆の呑龍などが見られた。たゞしヘマをすると全員がデレスケと怒鳴られ、整備兵に殴られた。学校でも当時は上級生が下級生を殴るのは伝統であったので、多少の慣れもあって気にならなかった。現在では一発殴ると暴行罪で損害賠償と云う付録までつく。勤務成績の悪る者が焼跡に残った建物を宿舎にした寮で合宿訓練を命じられた。弱い心身を鍛える名目だ。私もその一人であった。寮監は柔道の須田先生だったが、此処での生活は明るかった。運動あり講義ありで、夜は須田先生の怪談后試肝会もあった。急に腹が痛くなる者もいたが私は二番である。グラウンドの裏道を通り墓場にいき最初の者が置いた鈴を持ってくるので誤魔化しがきかない。真暗で先が見えないのでお化役の先輩の背後から顔を出し慌てさせたことなど懐かしい。先

輩には皆川、深井さん、同輩には鍋谷、潮田君がいた。その頃ビルマではインパール作戦が展開し20万人にも戦死者を出していた。勿論知る由もない敗色濃い情勢だったサイパン、硫黄島と相次いで玉砕し学園にもそのムードが迫っていた。私達学友は予科練や特幹(陸軍)を志願する者が増えた。佐藤、三島、常井君等は予科練へ、私は特幹飛行操縦であった。若鷲の歌を学帽を振って列車に乗込んだ。皆純真だった。特攻隊として志願し空母に体当たりすることが本懐と考へていた。「君の為何か惜しまん若桜散って甲斐ある命なりせば」であった。昭和20年8月末戦争が終わり、復員兵で上野駅は大混雑であった。立川飛行場からの私は偶然にも土浦から復員の三島君と一緒にになった。同級生感激の再会で軍隊から貰ったカンパンを戦災孤児に与へて乾杯した。学園に戻った者は旧18期である帝国軍人最後の特攻生残組でもあった。剣道部は武衛、小松先生を初め小林、大坂先輩から渡辺、坂本、山田先輩に至るまで魅力ある剣士が沢山いた。昭和21年春マッカーサー指令により廃止の浮目にあった。伝統ある剣道部解散に立会いはねばならなかった。敗戦国の無念さを痛感した。既に道具の一部は雑巾にされていた。木刀を部員にくぼって記念とした。今時大戦で250万の英霊が眠っている靖国神社に参拝し平和な現代を感謝せずにはおられない。100年も10年も1日も同じである。即ち人生は線ではなく生甲斐のある点だと聞えてくる。

「もはや戦後ではない」時代

新制10期 穴山 勝良

卒業してから30年もたつと、在校当時のことはあらかた忘却のかなたに消え去ってしまっているが、先般、幹事の方から能高60年に亘る「母校の出来事・国内の文化史」のダイジェスト版を頂いた。

我々新制10期生が在学していた昭和30～31年、及びその前後については次のようにメモされていたので、これをもとに当時の一面に触れてみたい。

母校の出来事・国内の文化史

昭和29年	お富さん・赤胴鈴之助ヒット。
30年 創立30年	●神武景気・コンピューター時代始まる。
31年 体育館建設	●太陽の季節出版 能代第2次大火
32年	●鍋底不況
33年	●万札発行 赤線の灯きえる。 有楽町で逢いましょ うヒット。
34年	●皇太子結婚 岩戸景気

これを見て、入学した30年には体操の全国制覇が続き、秋には創立30周年の記念行事を盛大に行われた年。

31年は春休み中に発生した能代第2次大火で在校生にも多数の罹災者が出て暗いスタートであったが、夏のインターハイでは、体操は連覇を続け、併せてバレーボールも全国優勝と、スポーツ面の隆盛と同時に各方面に亘って一層その力を発揮した時期ではなかったかと思う。

又、これを紹介されている文化史を見ると、朝鮮特需の反動で苦況が続いていた景気も、30年に

はようやく立直って世に言う神武景気を迎え、更には、その後の産業構造を根底から大きく変えたコンピューター時代も始まっている。

そして31年に入ると、「経済白書」で「日本経済の成長と近代化」の副題をつけて「もはや戦後ではない」と経済データーは戦前の水準を越えるものが殖えて順風満帆の感があった。

しかし、日本経済の基盤はまだまだ弱く、当時は特に外貨事情が足枷になって景気変動の振幅が大きく、且つ激しい環境下において、翌32年には早くも鍋底不況となり、同年の「経済白書」の副題も「速すぎた拡大とその反省」となっている。

一方、落込みは早い而立直りも早いのが当時の景況の大きな特徴で、33年には「景気循環の復活」と云われて上述の通り12月1日には万円札が発行されて翌年34年の岩戸景気へと、日本経済も一段と大きな力をつけて来た時代だったと思う。

これと同時に進学率は向上したが他方では集団就職も盛んになり始めた時代で、今日云われている過疎問題が既に萌芽していたのではなかったかとも思う。

最後に万円札の話が出たのでご参考までに紙幣の発行についてご紹介すると、

昭和25年1月7日	千円札発行
昭和32年10月1日	5千円札発行
昭和33年12月1日	万円札発行

となっていて、ご存知の通り59年11月1日に現在の紙幣に切替っている。

又、紙幣発行残高とGNPの推移を見ますと	
昭和25年末発行高	4,220億円
全年GNP	3兆9千億円
昭和30年末発行高	6,738億円
全年GNP	8兆8千億円
昭和40年末発行高	2兆6千億円